

バルナウル抑留記

山口県 早川 定雄

前に進まない重たい足を引きずりながら、やっと着いたという、そこはバルナウル捕虜収容所であった。誰ひとりとして口を開かず、目も動かさず、唯々朦朧として立っていた。自分自身も食べることより、一時も早く横になりたい、眠りたい、そのことだけを考えていた。

それもそのはず、牡丹江から一か月近くも有蓋貨車に乗せられ、食糧、寒さ、用便に泣きながら、毎日不安を抱いて揺れてきた。ある者は監獄列車と言い、ある者は地獄列車とも言った。もう体も心も自分のものではなかった。その疲労困憊は既に極限を超えていた。その日の夕食時、重たい箸を持ちながら、明日からの作業内容の発表を聞いた。

私たちの作業大隊は、戦車をつくる工場に行くとい

うことであった。どんな作業をするのか、工場に行つてからということで、何はともあれ、一気に寝ることになった。

主な作業は、戦車工場

翌朝、私たちは戦車工場へと出発した。およそ三キロほど歩いたところで大きな工場の前に来た。構内に入ると、数えられないほどの工場があったが、私たちの工場は、正門から十分程度歩いた所であった。

既に作業内容は、技術の経験、未経験に区分されており、未経験者の私は、自動タレットで仕事をする事になった。その製品は、五円玉くらいのナットをつくるのであった。

軍隊に入る前は、満鉄の車掌をやっていた私にとつては、全く未知の世界であった。ただ、幸いなことに、自動タレットであるから、鉄棒を旋盤に通せば、次から次へとナットができるのである。問題は機械の調子でナットの厚さが変わるので、それをチェックする計器を時々当てて検査しなければならなかった。この程度の作業なら何とかやっているとと思ったが、間

題はその翌週から起きた。それは、私たちの作業勤務は、三交代ということである。

私は、夜働くことは一度もなかった。だから夜の勤務となると、たまらないほど苦しかった。夜勤で、十一時を過ぎるとボツボツ眠くなり、二時ごろには恐ろしい睡魔に襲われ、動いている機械に倒れかかることがしばしばあった。また、そのようなウトウトしている状態を付き添いの兵隊に見られると、痛いほど銃でなぐられることもあった。また、夜勤明けで昼間寝ることができず、いずれにしても交代勤務になれるには半年もかかった。

そのうちに抑留者のほとんどの者が栄養失調になった。食事でビタミンを含んだ野菜類は全く見るものがなかった。そこでみんなアカザ（野草）を食べることを考えた。幸い、工場の周辺にはアカザが自生していたので、それをとって、工場内の蒸気でゆでて飯盒に入れて持ち帰り、夕食のとき食べた。ある日、いつものようにアカザを休憩時間にとっていたら、巡回の歩哨に見つかり、何をしているかと聞くので、アカザを

見せると、それならたくさんあるところに連れて行ってやると言われ、行ってみると随分あった。思う存分とって工場に持ち帰り戦友にも分配した。もちろん、その日の夕食にみんなで食べた。

シベリアの冬は早く、その頃の寒さは相当こたえるように感じ、栄養失調と寒さで病人が次から次へと増えてきた。そして下痢を伴い、病状はさらに加速し、亡くなる者も出始めた。私の戦友も入院したので、二三日をおいて見舞いに行った。まさに骨に皮がくっついている状態で、目だけが光っていた。そして「駄目かもしれないが、もう一度、おふくろが作ってくれた美味しいお萩が食べたい」と言っていた。あたかも子供が物を欲しがるようだった。戦友は、その晩何も言わずに亡くなったという知らせがあった。何と呆気ない、何と情けないことだろう。掌を合わせて冥福を祈ると涙がどっと出てきた。

汚い話になるが、下痢を訴える者は相当な数であった。血便をみない限りは作業に行かなくてはならず、工場の往復の途中で隊列を離れて用便をする者は毎日

のことであつた。しかしその者は、用便をしている最中に歩哨が飛んできて銃で殴り、足で蹴るというひどい仕打ちをうけるのである。牛や馬でもそのようなことはないだろう。

もう雪は膝近くも積もり、下痢気味な者は相当苦しいようであつた。満州に住んでいた自分には、雪も寒さもなれてはいたが、シベリアはそんな生やさしいものではなかつた。一つには防寒具のボロのせいもあるが、何よりも栄養不足が一段と身にこたえていた。

飢餓、酷寒、重労働と続くシベリアで、特に耐えがたいことに、夜間の石炭降ろしがあつた。それは二月の半ば頃であつた。

「起床」という大きな声で叩き起こされた。時計を見ると十二時少し前で、一番寝入ったときである。何事かと思つていたら、駅に石炭列車が入り、朝までにそれを降ろさないといけないというのであつた。我々は、戦車工場で立派に作業を勤めているので、予想外の作業ではないかと思つた。しかし、悲しいかな捕虜の立場である。そんな理屈はもちろん通るはずがない。

ブツブツ言いながら、眠たい目をこすりながら、駅へと歩いた。その日の吹雪はひどく、寒いというより痛いという、恐らく零下三十度はある吹雪の中であつた。駅に来てみると、暗闇の中に石炭列車は長々と並んでいた。勿論無蓋車である。何両編成かはわからないが、一車両に四名宛担当し、石炭をおろせということである。聞いた途端、みんな啞然として声も出ない。到底無理な話であるが、やれるだけやろうとスコップでおろし始めた。

最初は疲れないようにと、少しずつゆっくりとおろしていたが、それでは寒くてたまらないので、いつの間にか気合をかけておろし始めた。そのうち、一時間くらいたつと体の温もりで、眠気が生じてスコップは動かなくなり、ウトウトとし始めた。他の三人も同様であつた。しばらくすると、寒さと空腹とで目がパッチリとあいてきた。そのときの寒さ、空腹は何とも言うようながなく、このまま死んだ方がましだと思うようになった。

石炭は、まだ半分くらい残っているようだ。駅のラ

イトでぼんやり見えるけど、どの車両の動きも鈍いようであった。睡魔と飢えに襲われながら、スコップを動かした。

そのうち、うつすらと夜が明け始めた。石炭を見ると後少しであった。さあ頑張ろうと戦友と声をかけ合って、一気におろした。

そのときであった。突然「マーマ」「マーマ」という泣き声が近くでするので、目を貨車の上からその方に向けるとビックリした。泣いている十歳くらいの男の子の右足が、一メートル先に転がっているのである。もうその子は泣く声も出ない。失神状態のようでもあった。凍結したのか、体の方からも、もげた右足からも血は見られてない。

石炭列車が着くのを知って、石炭を盗みに来たのだろう。そして、先刻通り過ぎた入れ換え列車に足をもがれたのである。

ただ、このとき不思議に思ったのは、石炭を盗みにきた大人たちは、その子に手を差し伸べるのでもなく、茫然と眺めているだけであった。何と冷たい、何と非

情な国民だろうと、こちらも茫然と見ていた。そのようなソ連だから、我々の扱いについても、犬猫同様に思っている。そう思うと、これから先も暗い日が続くことだろうと情けなかった。

辛い石炭おろしと、突然の惨事に重い胸を抱きながら収容所に帰った。早速、朝食となったが、余りにもひどい空腹と惨事の子どものことを考えると、食事は喉を通らなかった。

集団火の玉は

終戦一年目を迎える夏に入った。シベリアは夏が暑い。毎晩蒸し暑い日が続いた。暑いのでみんな部屋を出て夜空を眺めていた。

私も星を眺め、母や兄妹のことに思いをいたしていた。そのとき、遥か東の空から、光のようなものが見えた。相当の早さでこちらに飛んでくる。ソ連参戦で不意に襲われ、海拉爾に投下された照明弾のようにも見えた。だんだんこちらに近づいてつれて、その光の大きさ、いや量は随分の数であった。誰かが「火の玉だ」と叫んだ。そうだ火の玉だとみんなが言い出した。

まさに集団火の玉そのものであった。そして、目の前に来たかと思うと、次々と炊事場の煙突の中に入った。光が見えてから、わずかに二、三分の出来事であった。火の玉を見たのは初めてだという者もいれば、今まで見た火の玉の百倍に近い数だという者もいた。私自身、集団火の玉は初めてのこと、血の気が一べんに消える恐ろしさであった。

火の玉を見た一時間後に、百名くらいの隊員が我々の収容所に移ってきた。その隊は十五キロ離れた伐採作業所の者たちで、一応伐採を終えたので我々の収容所に来たのであるが、その人たちから、火の玉を見なかったかという問いがあった。

聞いてみると、その人たちは、今までの収容所を後にして五キロくらい歩いていたら、後方のところから一斉に火の玉が追っかけてきたというのである。そして追い越し、こちらの方に向かったという。その火の玉は、亡くなった戦友の墓地が発生地であると。恐らく火の玉になった戦友たちは、自分たちを置き去りにしないで、一緒に連れて行って欲しかったのであろう

と、聞いているうちに身の毛がよだち、寒くなってきた。苛酷な捕虜生活に対する怨念と、日本に帰りたい一念で、その魂が火の玉と化したのであろうとみんな思った。この話を帰国してからすると、誰も信じてくれない。信じているのは自分だけである。

しかし、今なお、恨みと無念を抱いて凍土に眠っている幾万の霊がある。その心を知る者は、誰よりも苦勞をともした我々である。傍観の日々を送るようであれば、いつの日か集団火の玉が、日本海を越えて帰ってくるであろう。

入浴とシラミそして毛ジラミ

抑留中の入浴は、一か月半か、二か月に一回である。一か月もたつと、皮膚は垢でカサカサになってくる。その頃になると入浴したくてたまらない。しかし、その入浴が大変なのである。浴場は収容所からは遠く、片道五十分もかかるのである。戦車工場の三交代の休み時間に入浴するので、往復二時間近くかかり、入浴一時間と約三時間が必要とするのである。入浴といっても浴槽に入るのではなく、バーニヤ（蒸し風呂）で

ある。まず衣類をまとめて高温殺菌する。その間に少量のお湯で体を拭くのである。垢がボロボロと落ちる。消しゴムで体をすっている状態である。入浴する日は睡眠時間が充分でなく、その後遺症は二、三日続く。

また、冬ともなれば収容所に帰るまでに体が冷え、悪寒を生じることもあった。入浴時の衣類滅菌によって衣類に食い込んでいたシラミは全滅となる。当分はシラミから逃れることになるが、十日もすると出沒してくる。入浴があるまでは小まめにとる以外はない。

そのうち、収容所内では毛ジラミの発生が聞かれるようになって、みんなを悩ますこととなった。ソ連側も毛ジラミには神経を使い、その対策として、毛ジラミを持っている者も、いない者も、全員陰部を剃ることになった。陰部を剃ることは生まれて初めてのことである。休日のその日は、医務室前にみんな並んで剃られていく。剃る者はソ連の看護婦で、彼女たちは笑いをもって剃っている。ところがいざ剃ってもらうことになると、その痛さといったらたまったものではない。

カミソリは全くボロで、水を少しつけてバリバリ音を立てて剃るが、剃り終わってみると毛穴は高く膨れ、ところどころ血を噴いている状態で、夜になっても痛い。もう二度とこんなことはしたくないと思った。しかし、抑留二年間に三度剃られた。明日は陰部を剃るんだと知らされると、その日から精神的苦痛が走っていた。

二年目に入ってから、戦車工場の作業から小作業の方に回った。十人から二十人くらいの人数で、毎日作業が変わった。私は満鉄で少しロシア語を習っていた関係で、私を中心になって作業に行くようになった。

コルホーズの収穫作業

私たち二十名を乗せたトラックは、およそ二十キロほどを走ってコルホーズ（集団農場）に着いた。地平線らしきものは遠く模糊として見えるのみで、視界全体が農場である。燕麦、馬鈴薯、キャベツなどが一望に広がっている。久しぶりに青い空、広い大地をみて、昨日までの辛苦を一時忘れた。

今日はキャベツの収穫ということで、一人一人にス

コップが渡された。そして、三メートル間隔で横隊に並び、前に進みながらキャベツをとるようにと言われた。

一株ずつキャベツをスコップで掘っていると、そんなことをするのはなく、スコップでキャベツの根元を撥ねていくのだという。やってみると、首を撥ねるようにうまくとれる。これはおもしろいと次から次に前に進んだ。後を振り返ってみると、アッという間に三十メートルくらい進んでいた。しかし、おもしろいのもその辺りまでで、だんだん振り上げるスコップが鈍ってきた。疲れたのである。腹も減ってきたのである。それかといってやめるわけにもいかず、スピードを落として、それでも二百メートルくらいは前進したと思った。そのとき、休憩がかかり、その場に腰をおろした。

休憩後の指示が出た。畑のあちらこちらにある手押し車で、今までのキャベツを積んで倉庫に運べというのである。それならば余り撥ねるのではなかったと思ったが、もう手遅れだった。手押し車に積めるだけ

積んで運ぶことにしたが、途中コロコロ落ちるので、十個ぐらいにして倉庫まで運ぶ。畑はデコボコで、手押し車は思うように進まない。倉庫まで何回か運んだが、疲れきって、その数は覚えていない。もう手、足は棒のようになっていた。そして暮れていくキャベツ畑を後に収容所に帰った。

翌日もコルホーズの作業である。昨日と同じくキャベツの作業であった。今日は失敗しないで、ゆっくり撥ねることをみんなあで申し合わせ、のんびりとキャベツを撥ねた。

遅々として進まない作業に監督が来て、能率を上げないと帰らせないと言い、この杭の位置まで進み、そして手押し車で倉庫まで運べと指示した。一応、杭の位置までキャベツを撥ねたが、手押し車で運ぶと倉庫の位置は昨日の倍になり、さらに難儀な作業となり、トラックに乗ったときはかなり薄暗くなっていた。収容所に帰り、明日の作業予定はと聞くと、同じコルホーズと言われうんざりした。

また、同じ道程でコルホーズに着くと、今日の作業

は馬鈴薯掘りであった。馬鈴薯に傷をつけないように、できるだけ株の遠くからスコップを入れるように注意された。

みんなで漫々にやらないとまた倉庫まで運ぶのに大変だよと、そうすることにした。最初掘ったとき、びっくりしたのは、馬鈴薯が紫色なのである。珍しうにかじってみると、おいしいので食べていると、そこへ監督が来て、昼には馬鈴薯をしっかりと食べさすから、生はやめとけと言って去った。そうとなれば馬鈴薯掘りも頑張ろうということになった。

昼、掘った馬鈴薯が農場の炊事場で蒸かされ、私のところへ運ばれた。いくら食べてもよいということで、このときばかりと思う存分食べる気でいたが、もう我々の胃袋は大食できないものになっていた。食欲と消化機能が全く反対で、無理に食べないようにした。

随分余ったので、持って帰ってよいかと聞くと、よいというので収容所に持ち帰り、戦友たちに分配した。明日は飯盒を二つ持って行き、充分詰めて持ち帰る話をしたが、翌日の作業は変更されていた。

漬物工場の作業

明日は漬物工場の作業と聞いて、ちょっと興味がわいてきた。ロシア漬物は有名である。おいしいハルピンのロシア料理店でロシア漬けを食べたが、実においしいと思ったことがある。

好奇心をもって漬物工場に来てみると、その大きなのに驚いた。そういえば日本と違い、各家庭では漬物はつくらず、工場で一括してつくるので、その規模は想像以上であった。

工場の内は、日本の酒造会社の仕込み桶と同じようなものがずらりと並んでいた。その数は相当なものである。作業内容は、一つの仕込み桶を六人が担当。桶の中に三人、外に三人と配置し、外の三人が材料となるキャベツ、トマト（熟れていない物）、キュウリ、塩を中に入れる。それは五メートルもある桶に梯子をかけて、それぞれを容器に入れ、梯子に上って中に落とす作業である。この場合、キャベツは丸のままである。中の三人は、落ちたキャベツをスコップで碎く、どのように碎いてもよい。そして、トマト、キャベツ、

キューリを適当に混ぜ、岩塩を振りかけて足で踏む。これが中の作業であった。

一見簡単なような作業にみられるが、なかなか大変で、重労働であった。そこで、午後からは中の者と外の者が入れ代わり、作業のバランスをとった。一番苦労するのは、中の梯子と外の梯子の上り降り、漬物工場は暖房はなく、外気と同じようなもので、私たちは防寒具の作業で動きは鈍い。

漬物工場の作業も、私たちにっては苛酷なもので、一週間も続いたこの作業でみんな衰弱した。

炊事場の水運搬

抑留中、一番泣いた作業であった。

収容所の炊事場に百五十メートル離れた水場から水を運ぶのである。その運搬する容器は、日本で見られるセメン樽を一回り大きくした樽である。その樽自体でも百キロ近くあるもので、それに水を容れて、炊事場まで二人で担いで運ぶのであるが、担ぐのがやっという重さで、その重さに耐えながら歩くのであった。凍結している道は歩きにくい。足に力を入れればなお

さら滑る。五メートル歩いては止まり、また担いで歩く。肩に食い込んだ天秤棒の痛さは、百足にかまれたような言いようのない痛みであった。この苦しみを、一日二回運ぶのであった。

その肩の後遺症が今もあり、石を投げても肩に痛みを感じるのである。この肩の痛みが私をソ連人嫌いにしてしまった。

駅の除雪作業

二年目の冬を迎えたが、昨年よりもひどい豪雪に見舞われた。毎日毎日が吹雪で、収容所もとうとう雪に埋もれた。そのようなことから、駅の除雪作業に行くことになった。

貨物の積みおろしをする引き込み線で、毎日貨車が入るので、その日その日の除雪作業が要求された。一尺角のベニヤでつくった除雪スコップで、雪を角切りしては反対に放り投げていく作業であったが、なかなか要領がいる。防寒外套を着ての作業だから簡単にはいかない。本気でやればすぐ疲れてしまう。ベニヤ板にのせた雪は結構重たい。量を少な目にしてやるとか、

いろいろ工夫しながら、どうやらなれてきた。午前
一回、午後一回、それぞれ十五分の休憩があり、その
とき、休憩所で初めて腰をおろす。収容所から駅まで
は四キロもあり、作業が終わって帰る頃は、空腹と疲
勞で雪の上に寝たい思いがした。駅の除雪作業は、二
十二年の正月が過ぎても続いた。

ある日、駅に行ってみると、その日は他所の収容所
からも除雪作業に来ていた。休憩時間にいろいろと話
をしたが、そのとき海拉爾の部隊にいた者と出会い、
より多くの話をしていたら、先月、鉄道自殺をした抑
留者が出たと残念そうに話をしてくれた。よく聞いて
みると、その人は海拉爾のとき同じ内務班の栗原上等
兵であることがわかった。

栗原上等兵は十三年徴収兵で、私が十九年十一月に
入隊したときはノモンハン帰りの上等兵で、近く満期
除隊があるということで随分楽しくしておられたが、
ソ連参戦で除隊どころかシベリアまで送られてきたわ
けで、死を選んだやるせない気持ちはよくわかった。

空しいパン工場の作業

二月の半ばに、明日からパン工場の作業と発表され
た。みんな喜んだ。思う存分パンを食べる話にその夜
は賑わった。

翌日、軽い足取りでパン工場に行った。作業はパン
の材料を積んだトラックから、その材料を降ろし、倉
庫の内に運ぶ作業とわかった。

およそ四十キロもある材料袋を担いで、三十メー
ルの位置に運ぶので、四、五回も運ぶとうんざりして
きた。近くの製造工場からは、出来上がりのパンの匂
いがプンプン鼻をついてくる。

午前中の休憩時間には、オヤツ代わりにパンが出る
かと思ったが、その気配すらもなかった。午後も同じ
作業で、オヤツは何の姿もみせない。何と浅ましい奴
かと、自問自答して収容所に帰った。収容所に帰ると、
パンのおみやげがあるだろうと首を長くして待って
いる戦友がいた。

材木運搬作業

三月に入って材木運搬作業に行った。収容所から一
時間トラックに乗った。着いたところは、大きな河の

辺りであった。

その河はオビ河の上流であるが、上流といっても、大きな汽船（船の両脇に水車をつけて進む）が走っていた。

三月の早春とはいえ、シベリアはまだ凍土である。

しかし、風は幾分春めいたぬくもりをもっており、心を和ます。作業は岸辺にある材木を陸に上げ、それを二人で担いで、きれいに並べる仕事であった。よく見ると、私たち以外にも作業をする者がいた。ドイツの捕虜とシベリア送りの囚人（ソ連人）であった。ソ連人の囚人は必ず腕に入れ墨を入れているのですぐわかった。

哀しい墓地の整理

三月の下旬頃から、誰言うことなく、この春は帰国できると言っていると語っていた。

その頃のある日、十名編成で墓地の整理作業に行くことになった。もちろん、私たちの同胞の墓地である。冬の間に亡くなった者たちは、雪をかけてある程度である。ツルハシで穴を掘って、その中に埋没するの

であるが、凍土は堅く、ツルハシを打ち込んでもツルハシは滑るばかりである。何とかして掘り安らかに眠れるようにしなくてはと頑張ったが、無理であった。あきらめて合掌した。涙を流しながら。

帰国にのぞんで

いよいよ帰国する日が来た。自分ながらよくこまに耐えたと思った。日本に帰るまではどんなことがあっても病気をしてはいけないうと、絶えず言い聞かせた。特に下痢と風邪には最善の配慮を尽くした。お蔭で風邪も下痢もなかった。病気を治すのは医者でなく、自分自身であることがよくわかった。そのことを信条とし、今も生き続けている。

この手記を書いていると、どうしても、今もってソ連に抑留された無念さが私の心から離れていない。帰国してから今日までの過去を振り返ってみると、辛いことも苦しかったこともみんな懐かしい思い出となるが、抑留だけは違っている。そのことは、筆舌に尽くせるものではない。

【執筆者の紹介】

早川定雄氏は、昭和十九年十一月に、海拉爾第三六二部隊に入隊した。初年兵教育は暗号であった。第三六二部隊の大半は陣地を構築するため興味安峰に行ったが、早川氏は留守部隊に残った。ソ連参戦で海拉爾で空襲に遭い、そのまま四日四晩、眠ることなく興安嶺から博克図まで歩き、博克図から東滿に応援する列車に乗ったが、途中、哈爾浜で終戦を迎えた。

香坊で武装解除し、牡丹江収容所まで歩き、三月後の十一月、無蓋車に乗り入し、昭和二十二年五月二十六日に帰国した。

全抑協には五十五年にも会員となり、五十九年より山口県の事務局長となり、会の運営に努めた。特に、慰労金等の申請事務については、暑さにもめげず、山口県の全会員の申請業務に尽くした。これまでの彼の尽力には深く感謝している。

(山口県 瀬来 明登)

私の抑留

岐阜県 木村 秀雄

昭和二十年八月九日、突如ソ連軍は日ソ不可侵条約を一方的に破棄して満州に侵入してきました。装備は劣勢なれど敢然とこれを迎え撃つも、我に利あらず遂に八月十五日敗戦、無条件降伏となりました。

そして我々は牡丹江に集結、武装解除を受け帰郷の日を待ちました。しかし、それは余りにもはかない夢でした。

国際法もボツダム宣言も無視して、実に六十万七十万人の兵を捕虜として酷寒のシベリア各地に抑留して銃剣と鞭のもと重労働を強制し、零下四十度の広野で寒さと飢餓と病と戦いながら、ノルマ、ノルマ、ダバイ、ダバイと人間としての自由を剝奪され、牛馬のごそく酷使された。疲労困憊、病魔に冒され、故郷の妻子の名を呼び続けながら死の旅立ちをした戦友たち